

なる哉、と言畢つて而して瞑せり、享年四十八、子の鏡美裘を繼ぐ、才學優長、後徳島侯擢で、洋學の教授と爲せり、時に施氏の女亦既に長じて産科を學び、後ち備前岡山の女醫となる、良齋風貌端麗、性廉介にして、器識あり、深く流俗に阿ねるを惡み、その大阪に在るや、鴻池、加島屋、往往其富を挾で之を聘するも、良齋一として應じたる事なしといふ、生平交遊する所の者は、緒方洪菴、篠崎小竹、の數子に過ぎず、其劑を處方するや、治驗を先にして議論を後にす、常に藥性の功毒を辨するを以て務と爲す、嘗て藥能識一篇を著はして世に行はる、暇あれば則ち門生を率ひて近郊を游歩し一草一卉必らず之を採り、異種あるを聞けば百方搜索し、其乾葉落葩、則ち諸紙帖に挟んで時に出して以て其品質を論究す、從來譯述する所甚だ多く、(西醫新書)(内科捷徑)(外科精義)(銀海秘録)(藥品摘要)(飲食要訣)(眼科便用)(女科精選)及び(醫則)等數十卷、皆家に藏せり、初め施氏嘗て良齋の勤勞を賞し、書を與へて曰く、良齋余に従ふ多年、學を暗

む絶倫、夙夜懈らず、是れ以て識見浩博能く醫理と理科等に通究す、實に有意の士と謂ふ可しと、其れ師の獎許する所此の如し。

高野長英

〔183〕
名は讓、瑞阜と號す、父を後藤實仁と曰ふ、長英は其第三子なり、文化五年五月端午を以て陸奥の國膽澤郡水澤に生る、幼名を悦三郎と曰ふ、年十四、叔父高野玄齋に養はれ名を郷齋と改む、玄齋は水澤の邑主伊達將監の典醫にして杉田玄白に學ぶ、長英就いて家訓を受け略々蘭學に通ず、又漢學を兄直之進の義父坂野長安に學ぶ、會々兄直之進江戸に遊學せんとす、長英父に請ひて共に俱にせんと欲す、聽されず、告げずして出でんとすれば旅費の乏しきに困しむ、時に郷黨頼母子たのこを設くる者あり、月に金圓を醸し、抽籤して中る者は逐次に其醸金月額に倍蓰するものを得るの法なり、長英父に代つて其會に臨みて中ることを得たり、大に悦びて曰く、天之を

我に與へて志をなさしむるなりと、遂に拾五兩を懐にして坂野氏に投ず、父之を知りて其篤志を憐み、遂に遊學を許し更に學資を給與す、文政三年秋、長英年十七、江戸に上り堀留街の藥舖神崎源造の家に寓す、源造は玄齋の舊友なり、故を以て長英を視ること猶ほ子の如し、源造勤めて當時有名の蘭醫吉田長叔の門に入らしむ、勤學三年その業大に進む、長叔其才を愛し名を與へて長英と名づく、長英の水澤に歸るや玄齋其學を成さずして歸るを怒り、相見ること許さず、長英慨然として坂野氏に留ること三日再び江戸に出で、長叔の門に居ること二年、又駒留正見の門に遊ぶ、長英嘗て長崎に遊ばんとするの志あり、偶々長崎の醫師今村市庵江戸を發して家に歸らんとす、長英元と市庵を識る故に之に請て共に行かんと欲し、長叔は正見源造等に謀る、皆之を贊す、而して市庵發途の日已に迫り、之を郷に報じ允許を請ふに暇あらず、乃ち一書を郷に贈て其專行を謝し市庵と共に途に上る、長英難きに和蘭の丸散丹膏の法を源造に授く、源造大に長

英を異重す、是に於てその旅費學費を給して長英を助く、文政七年八月長崎に到り、蘭醫施勃兒篤に從て蘭學と醫術を習ふ、施氏醫を善くす、長崎奉行特に彼の我が病者を醫するを許す、諸國の醫學士來り學ぶ者頗る多し、高良齋、伊東玄朴、戸塚靜海、伊藤圭介、竹内玄同等皆その門に在り、長英其校舍に入り孜々勉勵すること二年、學業大に進む、又通詞者吉田權之助を助けて其塾の翻譯教授を掌る、九年三月和蘭貢使例によりて江戸に赴く、施方亦た從ふ、長英初め之に從つて歸らんことを郷に報す、而して猶ほ其切磋琢磨を望む、是に於て書を以て猶一年の猶豫を父に請ふ、長英の長崎に在るや、その其學資大概源造の支給する所に係る、江戸の醫山田某なる者あり藥價五十兩を源造に負ひて肥前平戸に往き、松原見朴と稱して松浦侯に仕へ、國政に參與し權勢頗る盛なり、源造之を聞き、長英をして代て其償を取りて學資に充てしむ、長英則ち山田を訪ねて源造の書を致す山田之を償ふの意なし、長英其守錢奴なるを知り乃ち曰く、此金實は生の

學資に充つるものなり、若し月に衣食の料を給し生をして力を蘭學に專にするを得せしむれば則ち足れりと、山田曰く、藩侯多く蘭書を藏す、而して之を解する者なし、徒らに倉庫の裏に在り、卿若し之を読み之を譯するの任に當らば、余當に藩侯に請ひて卿の衣食を給せんと、長英大に喜び之を諾す、是より書籍に富み復た采薪の勞なし、譯する所の書多し、皆な有益の書なり、是より先き施氏の江戸より歸るや天文司高橋作左衛門贈る所の日本實測の地圖を携ふ、事國禁に觸るゝを以て幕府の爲に長崎を逐はれ、復た我國に來ることなし、其罪に連坐する者數十名、長英その禍の遂に已に及ばんことを恐れ、密かに長崎を去りて薩摩に入る、十二年正月に至り長英等果して捕はる、六月に至て免さる、長英之を聞て長崎に歸る、長英の不在に際し會々父玄齋病篤きを以て門人小野良貞をして長英を迎へしむ、良貞の居所を知る能はず、玄齋終に歿す、已にして長英の歸るに及び之を告げて共に歸らんことを勸む、長英曰く、家君兒をして遠遊せしめしもの

は將來に期する所あればなり、今業將に成らんとして家君既に逝く、遺憾窮りなし、事此に及ぶ、郷に歸るも亦爲すことなし、我が學ぶ所の書大抵譯して囊中に收む、將に江戸に出で、之を公にせんとす、若かず、家眷を江戸に迎へて共に生を送らんにはと、良貞告げて曰く、君を後にし家を棄つる恐らく忠孝を缺くならんかと、長英曰く、我が志を立つる正に此時に在り、身を立て家を興すは江戸に非ずんば能はず、郷に歸らざる何の妨かあらんと、良貞終に去る、是歳長英居を江戸麴町に移し、醫療と翻譯に従事す、門客四方より集る、時に天保元年長英年二十七なり、三宅侯の臣渡邊華山長英の才を愛し、延いて藩の老候友信の蘭學の師とす、長英亦華山の人と爲りを崇み交情頗る厚し、共に西學を擴張し實利を興さんと欲し、紀藩の儒官遠藤勝助等と謀り一社を設け、名けて尙齒會と曰ふ、而れども是れ通常の尙齒會と異なり、老人の會して以て餘歳を樂むものに非ず、専ら政治經濟の道を講究し、人の諮問を受けて其利害得失等を議するの目

的なり、天保九年十月英船モリソン來航の説あり、而して其意互市を開くに在りと、時に幕府の諸官豫め之を待する方法を議し、或は曰く、文政年間の故事に依りて之を攘ふべしと、衆議未だ決せず、是に於て長英私かに華山に謂て曰く、彼れ我が漂民を護送し來る、我に於て厚く之に謝す可きなり、然るを反て之を攘はんことす、是れ仁愛の心に悖るのみならず、その怨を結び思を貽す、之より大なるはなし、恐くは幕府外國の事情を密かにせざるに出るのみ、華山之を然りと爲し、乃ち（臆舌小記慎機論）を述べ長英又（夢物語）の一書を著はし以て外國の形勢事情を述べ且つ盛にモリソンの豪傑なることを稱し（長英謂らくモリソンは人の名にして勇將の名なり、船名とするは誤れりと、人亦此説に反するものなし）以て攘夷を論ず、而して國政に關するを以て敢て人に示さず、竊かに之を幕府に上らしむ、十年譜者ありて曰く、近來蘭學の徒衆人を煽動し上下之れが爲めに誑惑せらる、今に於て之を法に處せざれば測るべからざるに至らんと、監察

鳥居耀藏之を閩老水野越前守に告げ、府下の蘭學者を捕ふの流言あり、既にして華山捕へられて獄に下り、長英下曾根氏に隠る、而して捕吏己れの家に入り文書を收めて去る、と聞き、自ら免れざるを知り乃ち後事を鈴木春山に託し遂に自首して獄に入る、獄吏長英に問ひて曰く、夢物語は夢中の記事なり、而して英國の人情風俗を記する詳なり、汝嘗て彼國に渡航したることありやと、長英曰く未だなし、吏曰く然らば則ち書中の記事皆な荒唐無稽にして唯だ世人を盡惑するが爲めに作りしものなるべしと、長英色を正して曰く、世上未だ天に昇り地に潜みし者あらず、而して能く天地の理を説く者あり、況んや英國の如き舟楫の通する所何ぞ其國情を知る能はざるの理あらんやと論辯屈せず、吏到底言を以て伏する能はざるを度り、唯獄に幽して其苦楚の爲に降るの時を待つ、長英亦吏の威に勝つ能はざるを知り、憂國の表情に發して他意有るに非すと述べ、以て宥恕を請へり、十二月廿八日吏突然長英と華山を召して宣告を爲す、長英遂に終身禁錮の

刑に處せらる、獄に在ること二年餘、獄宰と爲る居少しく安し、十二年四月三日獄に火あり官悉く罪囚を解散す、長英亦其中にあり、或は曰ふ、長英獄に在るの日、未決の囚徒榮藏なる者に授くるに罪を免かるゝの法を以てす、榮藏長英に約して放火し、長英をして脱獄せしめたるなりと、長英獄を出で、舊友大槻俊齋を訪ひ、衣剣を乞ひ剃刀を借て髪を剃り、伊東玄朴、竹内玄同等の諸友に至りて金錢衣服を乞ひ、儼然醫師の装を爲して去る、官其の歸らざるを以て骨相書を發して四方を搜索す、郷里水澤の地特に嚴なり、長英都下に潜むと一年、明年冬探偵の稍々緩なるを覗ひ、硝石精（硝酸）を以て前額を焼き容貌を變じて水澤に往き、曇きに母を托する所の家を訪ひ、母に面して其不孝を謝し、復た江戸に赴く、然れども永く留まらず、去て名古屋に至る、又その露はんとするを聞き、又逃れて伊豫に走る、宇和島藩主擢て譯官となす、長英是に於て少しく活計の安きを得、乃ち其の餘裕を妻孥に贈る、居ること三年江戸の友人竊かに書を寄せて探

偵の弛みたるを報ず、長英大に喜び宇和島を出で、江戸に歸り、姓名を變じて高柳柳之助と云ひ、鈴木春山に寄る、春山の知人松下壽醉は關老水野忠精侯の臣なり、大砲鑄造を以て名あり、春山爲めに介して交らしむ、壽醉長英の卓識に服し、其子健作をして火藥の製造、火器運用の法を學ばしむ、長英亦志を盡し其蘊奥を傾けて之に授く、壽醉大に喜ぶ、而して後ち高柳なる者は長英なりと知る、然れども殊に隠蔽して之を救はんを欲し、横井宗也と謀る、宗也乃ち長英を伴ひて幕府の軍務士官勝麟太郎（安房守時に年二十）を訪ひ之を謀る、勝氏曰く、我は幕府の祿を食むものなり、高野氏は幕府の罪人なり、我にして高野氏を匿すは義に於て能はざる所なり、然れども高野氏の我に於ける素より仇志なし、我れ必らず之を人に語らず、請ふ去て復た來ること勿れ、長英其言に服し、其手づから點竄批評する所の（鈐録外書）を贈りて云く、我曾て君の家に來るを紀念となせよと、此書傳へて勝氏の家に珍藏すと云ふ、長英後ち又姓名を變じて澤三伯と云ふ、是

より専ら翻譯に従事し梓に上ばすもの多し、大概人の需めに應じて述ぶる所なり、就中砲術書の翻譯は殊に其の生計を資けたりと云ふ、初め長英その妻を欺て曰ふ、赦に逢ひて獄を出でたり、然れども故ありて世人と交はるを欲せず、因て客を謝するなりと、日を経るに従ひ妻漸く長英の越獄したるを知れども絶て之を問はず、時に世上兵を講ずる者多く、西洋の兵式益々盛なり、長英乃ち兵書を譯して其需用に應ず、嘉永三年薩摩侯齊彬の命を承けて三兵操練の書を譯述す、其の文巧其の意明確尋常譯書の比に非らず、蓋し長英の積學と博通の力の由て致す所なり、薩侯之を賞し人に對する毎に其頁書を得たるを誇る、當時伊東玄朴蘭醫中頗る名望ありて、嘗て薩侯に謁す、侯長英の譯書を出して之を示す、玄朴之を見て驚いて曰く、是れ必らず高野長英の手に出でしものなるべし、今の時に當り蘭書を譯する此の如く精確を盡すもの長英を除くの外復た其人あるを聞かずと、侯は其臣僚の手を経て之を得たるのみ、又長英の何人なるを知らず、然れども

玄朴の言を聞て心竊かに長英の才學を慕ひ之を獲んと欲し、登城の際逼る人に問ふ、幕府の有司之を聴て始めて始めて長英の府下に潜むを知り、復たび逮捕の事を令す、川路左衛門尉其罪全く姦人の構造する所たるを知り百方之を庇護す、事遂に及ばず、長英松下壽醉の別業に往きて病者を診するの日、偵吏の爲めに發見せらる、然れども其亡げんことを恐れ敢て發せず、偶々長英と囚を同うせる囚人の罪を犯して縛に就く者あり、官之に諭すに、能く長英を發見して之を報せば、其罪を免さんことを以てす、一日長英の居青山の家に人あり、笠深く面を覆ひて至る、長英之を見れば先に囚舎を同うせるものなり、長英に請ひて曰く、僕再び罪を犯して探偵急なり、因て遠く奔らんと欲す、願くば僅少の金額を恵めと、長英之を實として金を與へて去らしむ、乍にして捕吏七人長英の家を圍む、三人床下に在り二人門より進み、二人中庭より向ふ、長英豫め戒心あり、庭前木葉を布き僅かに一路を通ず、長英食に向ふの特庭に簾々の聲あり、怪みて起つ、捕卒二人前後

に來り薄る、長英帶ぶる所の短劍を抜て一人を刺し一人を傷つく、呼んで曰く、命なり死すべしと、乃ち其刀を以て頸を刺す、捕卒萃まりて之を縛すれば已に絶す、實に嘉永三年十月晦日なり、長英年四十七妻及び四子、并に松下壽醉、松下建作等皆捕へらる、其他長英なるを知りて交はる者罰を受くる各々差あり、妻は閉錮せられ、四子及び家財は妻の弟に附せられ、松下父子は流に處せらる、長英人となり卓犖不羈、性酒を嗜み、醉へば則ち高談雄辯人の瑕瑾を指摘す、醫術より蘭學に入り終に蘭學者を以て家を立つ、強めて政治經濟の學を擴張し、醫術の如きは幾んど餘事となすに至れり、然れども世人長英の譯書を賞するに當て亦其醫術を賞せざるはなし、蓋し我邦西學を導きしものは長英の功實に崇敬す可きなり、獄中に在て記す所（鳥の鳴く音）文辭妙巧是れ長英が漢文に巧なると共に亦和文に通ずるの一斑を見る可きなり。

小關三英

出羽莊内の人なり、名は好義、篤齋又は鶴洲と號す、少にして才學あり、業を蘭人施勃兒篤の門に受く、刻苦奮勵す、喜で西史を讀む、尤も蘭文に精通せり、當時人は蘭學家の巨擘と稱す、既にして岸和田藩に聘せられて藩侯の侍醫となる、天保四年幕命を受けて輿地誌を譯して金若干を賜はる、三英稟質羸弱にして善く病む、且つ足疾ありて醫事に奔走することを得ずして常に家に居つて譯述及び教授を専らにす、高野長英、鈴木春山と深く交はる、その人と爲り篤實謹厚、人と争を好まず、又敢て時政を談せず、其性行二人と相反せり、而れども意氣投合し相許すに死を以てす、渡邊華山、亦深くその篤學を重じ屢々之を延いて益を受く、華山の海外事情に精しきは、實に三英等の力なり、長英、華山の縛に就くや、三英亦連坐せられんとす、時に三英謂らく、吾れ天稟尪弱なり、假令無事なりといふも亦恐

る可し、一旦病まば且つ死せん、況んや累然縛に就かば數日を待たずして死するや必せり、如かず先づ自ら圖を爲さんと、乃ち屠腹して死せり、或は云ふ、三英華山の爲めに耶蘇の傳記を講ず、將に業の卒らんとして會々華山捕はる、三英報を得て大に驚いて曰く、華山は正人君子なり、何を以て此に至る、顧ふに是れ必らず耶蘇教の事に關してならん、吾れ自首して以て其冤を雪がんと將に法術に赴かんとして俄かに又思ふ、耶蘇教は國家の大禁なり、吾既に禁を犯す、必らず嚴刑を受くるなり、若かず自殺して以て罪を贖んと、遂に乃に伏すと云ふ、時に年五十三、長英獄に在て之を聞き、遂然大息して曰く、嗚呼天下一名の士を亡へり云々。

鈴木春山

名は強、字は自強、三河の人なり、世々醫を以て田原侯に仕ふ、人と爲り卓犖不群、細節に拘らず、少時笈を鎮西に負ふ、歸て業を郷里に開く、術

大に行ふ、屢々奇効有り、後ち江戸に寓す、朝川善庵、鹽谷宕陰の諸儒に従遊して略ぼ經史に涉る、又高野長英、小關三英と交はり俱に洋書を講ず、尤も鉛鉛に精しく喜で劍法を演じ刀圭を顧みず、治を請ふ者あれば輒ちその方劑を書いて之を與ふのみ、居常慨然として曰く、兵は彼を知りて己を知るを以て要と爲す、方今我邦久しく安寧、文恬武熙、復た兵を講せず、而して西洋は則ち日に干戈を尋め戎政精を加ふ、則ち今日の急務は彼の形情を探り以て我が兵制を變ずるに在りと、是に於て西洋の兵書を研究し、(三兵活法)(兵學小識)(海上攻守説)等を著はして識者の稱する所と爲る、嘗て藩侯に獻策す、將に精兵を選み大旗を製し堅艦を造り、硝田を開き以て海邊に備ふ可しと、偶々疫を病み、志果さずして遂に歿す、臨終に胸を拊て大息して曰く、今何等の時ぞ、乃ち吾れ尸を馬革に裹せず徒らに衾擲の上に死せしむか、と、大に天を呼ぶこと三、遂に瞑す、年四十、實に弘化三年十月なり、春山性酒を嗜み喜んで時事を談す、王侯大人と語るに毫も

畏色なし、君側に在ると雖も、掉頭揺手旁ら人なきが如し、而して志義勇を尙び任恤に厚し、人枉屈を受くる者あれば軀を損して之を救ふ、長英の母を託すや、春山鞠躬以て其誼を盡すといふ。

堀内素堂

名は寛、字は忠龍、出羽の人なり、米澤侯の侍醫たり、人ご爲り謹嚴淳厚、夙に西洋醫方に潜思す、尤も力を實用に専む、往時其國に貧民子を生めば之を溺殺す、之れ俗習となりて恬と怪まず、戸口日に凋衰す、藩主鷹山公乃ち禁令を下す、凡そ民の兒を擧ぐる者に輒ち口俸を賜ふと、是に於て全く活す者多く、戸籍益々蕃し、國産益々裕となる、天下其仁政を稱す、素堂平生其仁心を仰ぎ以て徳恩に報ひんと意思す、嘗て本邦に小兒科未だ精しく且つ備はらざるを憂ひ、其術を研鑽すること數年、頗る得る所あり、乃ち扶歌蘭土の著はす所の啞科書を譯述し名けて(幼々精義)と曰ひ、附する

に(名稱義略)を以てす、其痘瘡を論ずると剴切精當、世醫翕然として之を奉崇せり、後ち又(保嬰瑣言)を著して以て其方を發明す、鹽谷宕陰瑣言の首に書して曰く、「其人謹嚴なるが故に其書を譯すや精にして確、淳厚なるが故に其人を論すや剴にして弊、」人以て知言と爲す、素堂嘗て江戸に寓す、廣く名士と交はり、業餘經史に渉る、詞藻を好み、時に翰墨を以て自ら娛しむ、晩に骸骨を乞ふ、歸つて郷里に終る。

日野鼎哉

(109)
 豐後の人なり、曉碧と號す、初め帆足愚亭に従ひ業を受く、後ち長崎に遊び蘭人施勃兒篤シボルに就いて學ぶ、京師に來り小石氏に依りて更に業を開く、鼎哉蘭學に精しく又其語音に通ず、最も外科に妙たり、偶々沈痾瘵疾を起す者甚だ多し、此より名望日に隆り、術業大に行はる、先きに新宮涼庭業を都下に開くや醫名籍甚能く其右に出づる者なし、鼎哉至るに及んで彼ら遂

に親を竝べて齊馳するに至る、時人良醫を品して京師には則ち日野氏有り、大阪には則ち緒方氏有りといふに至る、弘化初年痘瘡流行し之が爲め夭折する者その數を知らず、越前侯世子の夫人某氏亦難痘に罹り幸に死を免れたると雖も醜痕面に滿ち其素質を失ふ、侯是に於て大に痘毒の懼る可きを悟り笠原良策に召じて豫防の法を講せしむ、良策は鼎哉の門人なり、方に業を福井に開き侯の詢を受くるや會々鼎哉の加賀山中温泉に浴するを聞き即ち往て之を謀る、鼎哉告ぐるに西洋は既に種痘術なる者有るを以てせり、既に京に歸り専ら意を此に注ぎ百方其痘苗を求め遂に之を得、乃ち官に請ふて種痘館を都下に設けて其術を試む、又餘苗を緒方洪菴に願け勤めて種痘館を大阪に開かし孜々力を戮せ務めて之を播行せり、時に人は其新奇を怪みて信從する者甚だ鮮なし、後ち十餘年を歴て始めて其術行はる、嬰孩皆痘厄を免る、醫林鼎哉の首唱せる力なりと推せり、鼎哉の人と爲り矮軀癩骨、眼光人を射る、性狷介苟も人の失行を見ず、著はす所(梅毒一掃論)等の

諸書有りといふ。

大槻 俊 齋

名は肇、字は仲敏、陸奥桃生郡の人なり、父武次仙臺侯の支族片倉某に仕ふ、俊齋幼にして穎異、遊戯するや喜んで刀匙を玩ぶ、長するに及で好むで醫書を讀む、父其次子なるを以て沸谷氏の嗣子となして醫を爲さしむ、時に年十六、居る事一年、俊齋私かに謂らく、吾れの期する所天下の名醫と爲るに在りて一郷凡醫と爲るに在らず、安じて僻陬に居る可きやと、陰かに通れて郷に歸り、具さに其志を訴へ、江都に遊學せん事を乞ふ、父怒て聽かず、俊齋悵然として樂しまざる事數日、時に州の富山觀音堂に登りて食を斷ち祈禱する事七晝夜、以て宿願を達せんと欲せり、主之を憐み往て其父を説く、父固執して許さず、俊齋の兄龍之進は夙に砲術を講じ亦嘗て四方に志あり、因て私かに俊齋の爲めに路資を辨じて江都に奔らしむ、俊

齋都下に至るや郷人の木匠某の家に寄食せり、既にして川越侯醫高松尙齋の皂隸と爲る、鬪を偷みて書を読む、驅役奔走の間に在つても向手より巻を釋さず、尙齋その篤志に感じて乃ち延て門生と爲す、俊齋此より専ら事刀圭に従ふを得、幾ばくならずして尙齋の介にて手塚良仙の門に入る、良齋亦其精苦力學を嘉し眷顧頗る渥し、俊齋傍らに高野長英、小關三英等と締交し常に蘭書を講習す、居ること數年、良仙俊齋に資を給して更らに長崎に遊學せしむ、時に緒方洪菴亦在り、相俱に研磨する久し、後ち復た江都に還る、良仙女を以て之に妻す、勤めて都下に開業す、諸侯其名を聞いて往々之を聘す、仙臺侯召して侍醫と爲し祿百五十石を給す、嘉永三年官令を下して和蘭醫術を禁じ且つ醫書の刊行を嚴監す、安政初年俊齋（銃創瑣言）を著はす、幕吏江川某一見して要書と爲し即ち官に請ふて梓に上す、此より先きに（林洞海盜篤兒藥性論）を譯述して刊行を乞ふ、允されず、瑣言を刻するに及んで始めて允を得、初めて種痘法の新たに傳ふるや、俊齋

始めて其痘苗を高島秋帆より獲て之を淺草藏前の伊勢屋某の兒に施す、是れ都下種痘の濫觴と爲す、後ち伊東玄朴、戸塚靜海等と相謀り種痘館を内神田に建立し、明年之を官に獻す、官乃ち俊齋を徵して館長と爲し萬延元年更らに頭取と爲る、幕籍に列して祿百石を食む、此に至りて俊齋の素志始めて達す、龍之進亦秋帆に就いて益々砲術を研究し遂に仙臺藩の砲術師範職と爲るといふ、俊齋文久二年四月を以て病歿す、人と爲り豁達にして酒を嗜み、中年病を以て之を禁す、生平好むで兵書を講じ一時交はる所傑慨憂世の士多し、長英の脱獄するや密かに先づ之を訪ねて順逆利害を論す長英従はず、強ひて衣劍を乞ふて去る、俊齋因て嫌疑を蒙り屏居すること五十日、然れども竟に怨言を出さず、其病むや自ら起ざるを知り家人に語て曰く、吾少より辛苦醫を學び、遂に宿願を達するを得たり、死しても遺憾無し、且つ故人は往々命を鋒刀に殞す、吾れ則ち首領を全ふするを得て歿するは最も天幸なりと、終に逝去す、享年五十七。

土生 玄碩

安藝吉田の人なり、世々眼科を以て著名、玄碩に至つて最も内科に精通す、文化中廣島侯女を南部大膳太夫に嫁かし、偶々江戸の邸に在る時眼疾を思ふ、衆醫をして之を治せしむ、病倍々劇、皆手を束ねて以て不治と爲せり、侯深く之を憂ひ遙かに玄碩を召して治を托す、未だ半載に出でずして全癒す、四方之を聞いて治を乞ふ者門に盈つ、既盲者の頼りて明を得る者も數名、一時目して神醫と爲せり、既にして玄碩國に還らんとせしを幕府之を聞き、侯を諭して留止し、命じて將軍文恭公に謁見せしめ、櫻で、侍醫と爲し俸三百苞を賜ふ、文政九年、蘭醫施勃兒篤幕府に親む都下の唐人館に寓す、玄碩其の眼科に精しき事を聞き、幕府に請ふて教をその門に受く、夙夜勵精益々悟る所あり、遂に其術を豹變す、一日開瞳藥を施氏に質す、施氏曰く、眞若是なり、玄碩即ち之を都下に索せり、されど一人として其名

を知る者なし施氏曰く余嚮に江都に来るや、路適々函嶺を経て路傍に叢生するを見る、乃ち密に其根葉形狀を録して之を示す、玄碩大に喜び即日門生を遣して之を探らし、手から製して越幾斯劑と爲し、之を試用せるに屢々奇効を奏す、此より治効益々廣く施氏の都下に留まる事半載、將に長崎に歸らんとするや、玄碩臨るに將軍より賜はりたる葵章服二襲を以てす、施氏の獄長崎に起るや、官急に玄碩を召して之を詰して曰く、汝國禁を犯せり、章服を外人に贈るはその罪重し、即ち官祿を褫て獄に下す、五十日を経て赦さる、玄碩乃ち居を深川に移して更に開業す、業益々盛となりて名益々顯はる、天保八年に至り幕府その前勞を嘉みし、更めて嗣子玄昌を召して侍醫と爲す、賜ふに父の官祿を以てせり、初め玄碩の國に在るや歎じて曰く、吾れ唯祖先の施す所を施して以て治效今日に收む、實に僥倖なり、宜しく益々勉勵して之を實地に徹し以て其未だ精しからざるものを精しくせんと、於是奮然刻苦し、特に心を内醫眼に潜め、貧民乞兒を見れば

即ち衣食を與へて術を驗めす事數年、恍然發明する所有り、遂に此を以て世に著はる、子孫皆その術を紹げ世に其聲を墜さず。

伊東 玄樸

安政五年七月、幕府廣く侍醫を採訪するや、藩國醫員の中より擢用する四人、曰く伊東玄樸、戸塚靜海、竹内玄同、伊東貫齋之れなり、而して玄樸靜海、玄同の事は最も傳ふるに足るもの有り。玄樸、名は淵、字は伯壽、本姓は御厩、冲齋、長翁其號にして、肥前爾比山の人なり、少にして長崎に遊び譯官傳某に従ひ蘭學を受く、幾ばくもなくして歸郷す、後ち數年偶々蘭醫施氏の長崎に来ると聞き、再び笈を負ふて往て従ふ、居ること一年將に業を江都に開かんと、路大阪を經、時に路金缺亡す、乃ち悉く携ふる所の蘭書を賣り金若干を得て東行せり、至て則ち下谷に僦居す、然れども未だ人の知る所と爲らず、居ること久し、漸く治を乞ひ或は教を受くる者増加

し、時に其譯述する所の(醫療正始)廿一卷を世に出し、是より聲價日に高まる、弘化の初め鍋島侯聘して侍醫と爲す、既にして和蘭醫家後先輩出して各々術を争つて轍を樹つ、皆な内外二科を主たり、漸次其術の行はるゝや遂に漢方家と顔顔し、相互詆誹す、官猶ほ舊貫に仍り新方を擯斥す、乃ち令を下して曰く、「聞く近來蘭醫なる者流行し、貴賤之を信用する者日に多し、夫れ彼と我とは風土より以下凡百同じからず、乃ち醫療亦た隨て其宜を異にす、故に凡そ侍醫たる者は蘭方を用ゆる事を許さず、但し外科眼科之を參用するも妨げ無し」玄樸等之を聞き相議して斯道の維持を圖る、嘉永中遂に衆醫と俱に請ふて桂川國興の門に入る、國興即ち幕府の侍醫にして蘭方外科を以て最も著はる、故に倚てその助を藉く、これより蘭家の聲望益々隆る、而して玄樸の門業愈々盛となる、安政四年に至り同志と胥謀して種痘館なるものを府下に建て以て醫事を研究する所と爲す、明年大將軍温恭公疾す、幕府是に於て玄樸、靜海を擧げて内班醫師と爲し、玄同、貫

齋を擧げて奥醫師と爲す、玄樸法印に叙せられ號を長春院と賜はる、又齋に下す所の令を廢す、更に官醫に命じて西洋治術を學ばしむ、而して種痘館は之より官の轄する所と爲り、更めて教員を置き教授、解剖、種痘の三科を設く、後ち西洋醫學所と改稱す、玄樸軀軀短小、而して眼光炯々として人を射る、人と爲り豁達にして人に接するや城府を設けず、直に肝膈を吐露す、世是を以て之を多とす、性尤も彊記、凡そ一度病者を診するや其處方數年の後と雖も皆暗記せり、毫も錯差せず、聞く者驚服す、晩に及び名聲益々蔚然、明治四年病歿す、享年七十二。義子方成も朝廷の侍醫と爲りて門業の盛亦一時に冠たりしと。

戸塚 靜海

名は維泰、字は藻德、晩に春山と號す、遠州掛川の人なり、父培翁醫を以て藩侯に仕へ三子あり、靜海その季、年十八、十束井齋に従ふて蘭書を講

ず、傍ら漢學を松崎謙堂に受く、二十二の年宇田川榛齋の門に入り精苦人に超也、會々蘭人施氏の長崎に來り、治を施して奇効を奏す、又醫學及び植物學を以て徒に授く、榛齋素より靜海を器とし、因て勤めて遊學せしむ、施氏亦喜で以て人を得んとす、時に文政七年某月なり、居る事數年會々施氏の獄に下るや高良齋、高野長英、等と俱に囚に就く、數月にして赦さる、而して施氏は即ち其國に追はるゝや、是に於て四方の來學者皆靜海を推して宗と爲す、靜海長崎に留まる八年再び江都に來りて業を茅場街に開く、聞望益々隆る、初めて太田侯に仕ふ、年四十四、薩摩侯請ふて以て藩醫と爲す、侯賢明を以て著はれ、深く靜海の用也可きを知る、靜海亦その知遇に感じ事に隨ふや啓沃する所多し、既にして侯卒す、幕府召して侍醫と爲す、法印に叙せらる、伊東玄樸と同寮、竝んで名を一時に擡ぐ、是より先き蘭醫の所在に觸起するに雖も、其窮探講論する所は槩な空言に止る、靜海に至るに及で、始めて西洋名醫に親炙せり、最も外科に長じ、其手術を

實用に體究せり、後進の入門の軌躄を踐む、尤も斯學に功ありと爲す、人と爲り恬靜寡欲、専ら業を勉めり、明治九年一月逝去、享年七十八、靜海の世に在るや、玄樸及び坪井信道と巍然鼎立す、交誼亦た厚く世稱して近世洋方三大家と爲す、義子文海業を承け後ち海軍々醫總監となりて一時名聲を震ふ。

竹内玄同

西坡と號す、世々越前丸岡侯の醫員たり、初め藤林普山に従ふて蘭學を攻め、後ち長崎に遊び蘭人施氏に就て醫を學ぶ、伊東玄樸、戸塚靜海等と交り善くせり、學成りて歸るや、侯拔擢して侍醫と爲す、幾くなくして居を江戸に移し、幕府の徵を蒙りて侍醫と爲る、法印に叙せられ、號渭川院を賜はる、西洋醫學所長を兼ね、文久三年大將軍昭徳公に従ひ京師に入る、既にして公疾篤、玄同夙夜侍奉して膝側を離れず、時に適々眼を病ひ自ら

治するに暇あらず、遂に失明せり、是に於て玄同仕致して自ら風香と號す、明治十三年歿す、年七十六、子を正信と云ひ、召されて朝廷の侍醫と爲る、伊東方成と列を同ふせり、玄同の容貌は魁梧、舉止端正、言語は苟も發せずして其胸襟や洒脱たり、物に觸れ情に感ずる毎に必らず詞賦を發す、専ら懷ろに風月を寄せ復た世事を問はざりしといふ。

佐藤泰然

江戸の人なり、初め田邊庄右衛門と稱し、幕府の小吏たり、少にして醫を好み、松本良甫と交を善くせり、嘗て俱に足立長雋の門に往來して、醫書を講習す、既にして謂らく、蘭文に通せざれば則ち其理を究むる能はず、と、會々高野長英の長崎より歸りて都下に開業するや、泰然乃ち往て教を受く、然れども長英の性疎放にして酒を嗜み諸生を顧みざるなり、泰然聞らく、志意に果し難しと、是に於て將に長崎に遊ばんと、因て仕致して今

の稱に更む、天保甲午春、遂に長崎に至り、譯官末永某家に寓し、蘭學及び醫理を研鑽す、居る事四年、江戸に歸つて又今の姓に更む、醫業大に行はれ、門人日に進む、泰然雅量有りて衆を容れ才を愛す、故に其門下に名を成す者尠からず、林洞海、三宅良齋、山口舜海の如き最も著はる、戊午年、佐倉侯の聘に應じて居を下總に徙す、即ち大なる學舎を建立して諸生に教授し、別に一舎を設けて病者を延く、名聲日に噪然せり、泰然生平外科を専力し、嘗て門人に語つて曰く、吾れ本邦の外科術を觀るに南蠻流に非ざれば則ち和蘭流なり、皆百餘年前の説を師とす、其術の鹵莽淺劣論ずるに足らず、近時華岡流の如き其名則ち盛なれども其實は亦所謂南蠻流の一派にして往々粗豪の弊無しとせず、吾は則ち學術の眞理に徴して以て外科の蘊底を示さんと欲するなり、又嘗て曰く、醫者は學術精妙にあらざれば則ち以て人を極め世を濟ふに足らず、吾れ世醫を觀るに才の長短、術の工拙を問はずして必らず其子をして業を嗣がしむ、故に唯醫の名あるのみ

にて醫の實無き者多し、豈に或の甚しきに非らずや、是れ以て泰然は子有りとも雖も敢て業を傳へず、別に門人の舜海を選むで嗣と爲す、明治五年病を以て東京に歿す、舜海後ち稱を尙中と改む。

佐藤 尙中

(213)

從五位大學大丞大博士大典醫たり、千葉下總佐倉の人、字は赤那、尙中は其名、舜海又た笠翁と號す、本姓は山口氏、父を甫仙と曰ひ小見川侯の侍醫たり、尙中幼にして江戸に在り、老儒寺門靜軒に従ひて學び、粗々書史に涉る後ち去りて醫を安藤文澤に學ぶ、嘗て隣坊に争鬪して大傷を負へる者あり、急に文澤を招きて治を乞ふ、會々文澤出で、家に在らず、尙中乃ち縫女が用ゆる所の鍼線を借り、馳せ赴きて創口を縫合すると二十四刺、而して擧止自若毫も難める色なし、時に歳甫めて十有六なり、已にして文澤歸り來り之を觀て驚歎して曰く、是れ實に國器なり、久しく我が門に屈

すべからざるなりと、因て佐藤泰然に就きて學ぶことを勸む、蓋し泰然は當世の良醫にして尤も外科に巧みなるものなりと云ふ、是に於て尙中大に喜び去り、贊を泰然の門下に執り、蘭書を講究して兼ねて手術を習練す、安政中泰然佐倉藩の爲めに聘せられ尙中を隨へて之に赴く、而して病者あり來りて治を請ふ毎に之を尙中に委ねて療せしむ、尙中命を受けて藥攻刀割症に隨ひて方を設く奇効あり、時人其出藍の譽あるを稱す、泰然遂に尙中を養ひて子と爲し、老を告ぐるに及び家を讓る、藩主復た尙中を引きて侍醫と爲し、眷遇益々厚し、萬延元年徳川幕府蘭醫百明を長崎より招致す、尙中乃ち藩命を奉じ往て學ぶ、夙夜勉勵殆んど寢食を忘る、百明之を稱歎し盡く其の方を授く、而して其治金瘍折瘍祝藥割殺皆な尙中をして鉞刀を執らしむ、而して學成るに及びて東歸す、時に百明外科書數部を以て之に贖す、皆な歐洲名醫の著はす所なり、尙中熟讀玩味して大に得る所ありと云ふ、已に歸りて濟衆精舍を築き七科を分ちて教授し、別に一舍を設けて

病者を延き以て之を治療す、是に於て弟子益々進み治を乞ふ者蟻集す、藩主又尙中の議を用ひて醫政を更革し病院を建て衛生館を設け洋方を主とし衆醫を招き、尙中を以て一等醫と爲し之を總管せしむ、而して格を側用人に班し糧三十口を増給す、時人之を異數と爲す、既にして幕府其名を聞き辟して醫員と爲さんと欲す、然れども尙中固く辭して往かず、後ち國家中興王政古に復す、明治元年大學を東京に設く、而して其東校専ら醫學生徒を教授す、明年尙中を徵して大博士と爲し大學東校の事を勾當せしむ、其明年正六位に叙せられ大典醫に兼任せらる、尙中旨を奉じ聖上に近侍し生理書を講ず、四年從五位に進み兼て海軍病院の事を勾當す、是の年尙中建議する所あり、言未だ行れずと雖も時人之を偉と爲す、尋で大學大丞に遷り仍は大博士大典醫を兼ね、後ち所見の合はざるあり、病を謝して仕を致し私力を以て病院を城北練塲坊に建て、名けて順天堂と曰ふ、而して堂甚だ廣からず衆を容るゝに足らざるを以て更に大厦を湯島に造り以て徙る、

是より先き門人（其姪）高和進を養ふて嗣と爲す、蓋し亦父の志を奉ず、時に進醫を獨逸國に學び會々業を卒へて歸るや、共に協力して益々其業を擴張せり、是より生行日に増し而して治を乞ふ者月に多し、奇疾劇症の藥石を以て救ふべからざるものと雖も、刮骨剝肉立に其功を奏す、是に於て順天堂病院の名大に海内に喧傳す、明治十五年尙中肺を病で遂に起す、暫らく北郊の別墅に退き以て病を養ふ、而して未だ全く癒わざるに往て事を視る、人あり之を諫止すれば乃ち曰く、衆人命を我に托す、我れ寧ぞ吾身を顧るに暇あらんやと、終に復た退て病を養はず、是を以て日に篤を加へ實に明治十五年七月廿三日逝去す、尙中文政十年四月八日を以て生る、享年五十六なり、越て三月豊島郡谷中の塋に葬る、資性沈毅事に臨みて百折撓まず、平生醫道の興廢を以て己れの任と爲す、嘗て曰く論に精くして術に疎なるは學者の通弊なり、而して外科最も甚だしと、乃ち之を實地に試み刳破抽割手に隨ひて刀を運らし、其の卵巢水腫を截開し、或は皮肉を

剝取して鼻缺を補ふが如き未だ邦醫の爲さざる所のものを爲して其の治するを見ること云ふ、又規程を設けて後進を誘掖す、因りて門人三千の多きに達す、而して其世に顯はるゝもの十餘人あり、著す所（外科醫方（濟衆錄）等の諸書世に行はるゝこと云ふ、尙中高橋氏を娶りて二男一女を生む、而して側室某氏三男二女を生む、其嗣を定むるや、師泰然に倣ひて生む所の諸子をして各々別に生計を營ましめ、姪進を養ひて子となし、以て長女に配す、又門人岡本大道を養ひて嗣と爲し襲ひて佐藤舜海と稱せしむ、二人皆醫を以て仕ふ。

青木周彌

名は邦彦、月橋と號す、周防大島郡の人なり、家世醫を業とせり、父玄棟嘗て豫人の聘に應じて其に地に業す、後ち醫生に妬忌せらる、玄棟死に臨み慨然として周弼及び次子の研藏を戒めて曰く、汝曹良師に就て大に學業

を成せ、以て余の志を償ふ可しと、周弼既に長じ、長門藩醫能美佑菴の門に入り漢醫方を學ぶ、時に蘭人施氏長崎に在りて醫名籍甚たり、周弼和蘭醫方の精妙なることを聞き、乃ち往て業を受く、既に幕禁に觸るゝを恐れ去つて江戸に遊ぶ、坪井誠軒の塾に寓し旁ら宇田川榛齋の門に入りて研精勵刻す、業益々進む、居る事數年、再び長崎に來りて始めて業を開く、病客恒に門に盈つ、治効頗る多し、藩侯其名を聞き聘して醫員に列し、祿廿五石を給す、治を乞ふ者益々多し、贊を執つて教を受くる者常に百餘人に垂る、天保壬寅、藩侯に建言して新たに醫學教授所を設く、名けて好生館と曰ふ、醫生館に就き講習せしめ以て大に蘭藩醫風を振興せしむ、嘉永の初、擢して藩主の侍醫と爲し、祿百石を増給す、勅に扈り江府に往來する事數十回、周弼夙に種痘術の鴻益を知る、然れども毎に其種を獲るに由なきを以て遺憾と爲す、會々蘭人の之を齎らして長崎に至ると聞き、急に弟の研藏を遣り始めて其種を獲る、乃ち先づ之を己の子女に試み、尋で藩主

に請ひ、遍く邦内に施行す、且つは百方其普及永續の方を計畫せり、安政中虎疫の流行するや、世俗未だ其傳染病なるを覺らず、醫も亦た能く之を治する者なし、周弼慨然として日夜拮据して豫防及び醫治の法を講ず、藩に請ふて之を管下の醫生に諭し、且つ權に好生館を以て病院と爲し、藩醫宿直して以て其急に應せしむ、民由て以て横殤を免る者多し、周弼平生父の志を紹述するを以て心と爲す、故に終身勤勉分陰と雖も敢て徒費せず、病革の日に至るも手より尙ほ卷を釋さざりしといふ、著はす所(醫院類案)(察病論)(袖珍内外方叢)(病理論)等の數種有り、萬延元年歿す、弟研藏を以て嗣と爲せり。

緒方 洪菴

〔219〕 足守藩の士惟因の季子にして其先きは緒方三郎維榮より出づ、名は章、字は公裁、舊と三平と稱す、後ち洪菴と改む、父惟因嘗て藩邸留守を以て大

阪に在り洪菴隨ふ、日に文武諸技を研習せるも身體羸弱にして武藝に勝へず、是に於て始めて醫術に志し、獨り自ら和蘭譯書を讀む、未だ幾くならずして父兄事に坐し免黜す、洪菴隨て國に歸る、家窮困にして給を取る所なし、乃ち再び大阪に来る、時に中天游なる者あり、蘭方を以て世に行はる洪菴(十五歳)其塾に寄食せり、居る事四年、譯書に涉獵して略ぼ盡す、天游曰く、方今西學日に隆なり、而るに譯書尙ほ未だ完備せず、學ぶ者は宜しく原書に就て其奥を究む可し、願ふに吾は老ひたり、子や宜しく力を斯に用ゆ可し、洪菴是に於て江都に赴き師を求めんと颯然國を辭して東行す、途に衣を賣り刀を鬻ぎ以て盤纏を資く、窮困甚だしく、都門に入るを得ずして、迂路上總を経て某寺に投じ宿を乞ふ、時は方に嚴冬なり、洪菴身は唯だ單衣に一の書囊を負ふのみ、寺僧憫みて之を許す、因て其業とする所を問ふ、洪菴乃ち囊中の西洋曆象新書を取り、爲めに之を演説す、理旨明暢、僧奇なりとて近隣の醫流を集め俱に其説を聴く、留ること數日、謝金

若干を獲る、洪菴乃ち裝て遂に江戸に入る、首めは坪井誠軒の門に入り蘭書を習讀す力多く書を購する能はず、人に借りて之を茅紙に謄寫す、勵精苦心日夜懈らず、術業駁進す、同塾の諸生能く及ぶ者なし、誠軒其志を嘉みし爲めに衣食を給し、命じて接客を爲し、教誘懇切至らざるなし、洪菴又傍らに宇田川榛齋の門に往來し藥物本草を講ず、素より數學に通ず、尤も度量の沿革に精し榛齋の西醫方名物考を著すや、洪菴與に力ありといふ、後ち長崎に遊び蘭醫に親炙し、質すに宿疑を以てす、因て其蘊奥を究む、從學する者甚だ多し、乃ち徒を卒へ業を大阪に開く、是に於て名聲大に興る、遠近其風采を望む、足守侯擢で侍醫を爲す、諸公侯亦争つて診治を求む、文久二年幕府召して侍醫を爲し俸三十口を賜ふ、尋で西洋醫學所頭取を兼ね、明年六月十日病みて歿す、歳五十四、駒込の高林寺に葬むる、洪菴人と爲り温厚にして喜怒を見はさず、親師に事へて孝敬なり、その大阪に在るや歳に一二次必らず郷里に歸省す、又其誠軒、玄眞、天游等の忌辰毎に

影像を設けて之を祭る、而して人の急難に赴くに水火と雖も辭せず、常に力を譯述教授に用ゆ、初め榛齋の遺命を奉じて(病學通論)三卷を譯し聲價益々騰る、後ち(扶氏經驗遺訓)三十卷を譯して病理及び治療法此より大に備はる、安政戊午虎狼痢病の大に海内に流行し、病勢猛烈、死する者算ふるなし、時醫其新症に屬するを以て往々手を束ね坐がら其斃を視る、洪菴慨然として晝夜力救す、又(虎狼痢治準)一卷を著はし將に梓に上せ世に傳へんとするに、未だ官に請ふ遑あらずして其書既に四方に傳播せり、世此に由て略ぼ治療の南針を得たるなり、是より先き洪菴始めて種痘苗子を得て大に喜び、官に請ふて種痘館を設け、東奔西走人を勤め之を驗す、復た其費を省みず、府人今に至るまで洪菴唱率の功を稱す、洪菴既に府下に振鐸するや、前後從學の士幾ど千を以て數ふ、名士多くその門に出づ、佐野常民、福澤諭吉等の如き是なり、而して凡そ醫學の科級を設け教授法を立てたるは蓋し洪菴を以て嚆矢と爲す、洪菴國雅を嗜み暇あれば則ち飄詠を

寄す人亦其雅韻を愛す、嗣子洪哉少にして才名あり、嘗て獨乙國に留學し故陸軍々醫監緒方惟準是なり。

川本幸民

攝津三田の人なり、父周安と稱して九鬼侯の醫員たり、幸民幼にして孤となり、兄周馬に依る、稍々長じて藩蠻に入り嶄然として頭角を見る、年十八、播磨に遊び醫を宇野某に學ぶ、和漢方書に涉獵す、既に選ばれ資を賜ふて江都に遊學し足立長雋の塾に寓し、始めて蘭學を攻む、長雋その異才を歎じ、一日之に謂て曰く、子の材や必ず大成する所あり、余は子の師に當るに足らず、宜しく坪井誠軒に従ふて學ぶ可し、余は爲めに之を介す可しと、幸民是に於て誠軒の門に入り、四方の俊髦と相切磋すること四年、後ち去りて京阪を往來し、遍に大家名匠を訪ふて益々學術を磨礱す、天保五年本藩に仕へて醫官に列す、侯に隨ひ再び江都に来る、乃ち芝の露月街

に卜居して開業す、幸民最も理化學に精し、嘗て舅氏青地林宗の成書を補述せり、(氣海觀瀾廣義)十五卷を著す、是に於て其名始めて顯る、嘉永中米國の使艦浦賀に來るや、邦人概ね洋技に盲し、その汽艦の宏壯機器の精巧を觀て瞠目驚魂せり、幸民は夙に其機巧を審にす、乃ち適西奇器述一篇を著し詳かに其製方を説く、世争つて傳誦せり、當時薩摩侯の創めて昌平艦を造るやその製方實は幸民の著書に因る、是より薩侯益々幸民を器とし、屢々其邸に邀へ諮詢する所多し、侯嘗つて時勢を察し、洋學の講せざる可らざるを悟り、其學校を興し以て幸民を聘して學頭に爲さんと欲し、終に自ら九鬼侯に請ひ辟て以て其藩籍に列せり、蓋し此時九鬼老侯既に卒せり、幸民抱負する所を施すを得ず、會々薩侯の知遇を蒙り、於是遂に其辟に應せり、安政三年幕府幸民を擧げて洋書調所の教授と爲す、文久二年遂に幕籍に列して班を儒員に亞ぐ、箕作阮甫と列を同ふして名を齊にす、丁卯戊辰の際に及んで慨然として曰く、主家事己に此に至る、吾れ尙は其祿

を食るに忍びずと、乃ち仕を辭して三田に歸り、著述して自ら娛む、既に病に罹り沈寐歳を経る、明治三年其子清一更に微を蒙り朝に仕ふるや、俱に東京に赴く、明年夏終に歿す、平生譯述する所甚だ多し(理學原始)(地球理説)(舍密讀本)(舍密眞言)(化學初教)(化學通)(依百乙人身窮理)(藥治溯源)(硝石考)(印度築城砲術書)等有りて、他に又(暴風説)(汽船説)二書の如きは嘗て之を幕府に献せりと云ふ、幸民天資聰敏にして精力人に過ぐ其書生たるや、勤苦淬勵少しも懈らず、倦めば則ち酒を藉りて氣を鼓せり、同學の緒方洪菴毎に歎じて曰く、幸民愈々醉ふて愈々勤む、吾人の及ぶ所にあらずと、幸民嘗て親しく撮影術を試み、創めて銀波の光畫を製す、後ち歐人の寫す所の像影を視て更に之を玻璃版に試み、刻苦する事半年、其工始めて成る、而して其要とする所の器械藥品の類は皆自ら製造せり、乃ち(寫眞方)一篇を著す、其術を説くや厥なり、後ち數年にして其術始めて我邦に傳はる、此より幸民は斷然復び爲さず、嘗て薩侯の命を受けて製造せ

る所の戎器、藥物、機工等は則ち後に多く國家の實用に供せりと云ふ。

寺地 强平

備後福山の人なり、名は豊、字は子亨、舟里と號す、世々阿部侯に仕ふ、强平支子たるを以て醫を志し、初めて漢醫方を學ぶ、年十九醫範提綱を讀で慨然として曰く、濟生の真理此に在りと、文政十二年の春、出て京師に遊ぶ、當時京坂間に洋學未だ行はれず、唯譯書を講ずる耳、是に於て去て長崎に往き始めて蘭書を讀む、研精すること三年、遂に江戸に入て業を坪井誠軒に問ひ、緒方洪菴、及青木、川本諸人と日々討論して業益を進む、天保八年郷に歸る、初め洪菴と約して各々京阪に分居し、大に其學を開かんと、此に至て將に出て、京に寓せんとす、父聽かず、强平悵然として曰く、之を父母の邦に開くも亦我任なるかと、乃ち福山城下に卜居せり、時に城下の醫中に一二洋方を喜ぶ者有り、然れども亦唯譯書に據る耳、其直ちに

原書に就てその方を用ゆるは實に强平一人なり、衆或は嫉み或は誣誹す、强平更に顧みず、洪菴諸友と往來して孫切益々勤む、治効漸く人に孚く、强平又種痘法の始傳を聞き、奔走して其苗種を得之を城下に傳播せり、時に俗疑或し衆口囂然たり、强平百方説諭し、然して後ち其術漸く行はれ濟はる所日に多し、此時に當り藩主阿部正弘は幕府の老中たり、强平を江府邸に召し、待するに異數を以てす、専ら洋書を講じ、既にして藩校を命じ洋學科を創立す、强平に令して歸て教授に任ず、後其學益々地方に開く、更に醫學校を設け兼ねて病院を開き、强平を推して長と爲す、時に明治三年なり、是に至つて强平の宿志始めて大に行はる、强平の人と爲りは温雅にして灑落、善く談ず、其學の旁ら理化物産の諸科に長ず、嘉永中に海防令の發するや、福山の火藥之を他州に仰ぎ、强平建言して製造場を設く、藩始めて便を得たり、後ち蝦夷开拓の事あり、乃ち生命を奉じて藩士と蝦夷諸島を跋渉して开拓説を作りて之を獻す、平生著はす所皆な家に藏す、

其世に行はるゝもの獨り（大砲使用規範）一書有り。

高橋春圃

筑後岩屋の城主高橋紹運の後裔なり、子孫世々肥後阿蘇郡に家す、醫を業として熊本藩老長岡某に仕ふ、春圃に至りて藩侯召して郡醫と爲す、後屢々其治術を賞勵して擧げて士籍に列す、春圃幼にして孤となる、業を漢方諸家に問ひ、刻苦淬礪餘暇に人の爲に字を寫して以て學資を助けたり、學既に成り歸て業を郷里に開く、天保の初、京師の日野鼎哉來つて肥後に寓す、會々一患者あり、衆醫皆手を束ぬ、鼎哉獨り之を活す、春圃其術を奇とし往て鼎哉に見ゆ、益々其説に服す、是に於て始めて始めて西洋醫方に志す、乃ち妻子を外舅に托して鼎哉と同じく長崎に遊ぶ、蘭醫に親炙す、又旁らに竹内玄同に師事して居ること數年、業益々進む、郷に歸つて其得る所を施す、治を乞ふ者門に填つ、既にして痘瘡大に流行す、春圃の長子甫めて六

歳、亦感染して殤る、春圃歎じて曰く、痘は兒童の一大厄なり、豈に術以て之を免る可き無きかと、嘉永元年の秋、蘭人門尼幾（オシノカ）天草島に來りて、種痘法を傳ふ、春圃大に喜で曰く、是れぞ以て民の壽域を躋ふ可しと、乃ち郵券を請ひ天草に航す、至れば則ち門尼幾既に去つて長崎に寓す、乃ち尾て赴き留まる事數月、其法を得て而して歸り痘苗を同業者に頒ち相俱に大に國中に施す、是より先き某生なる者ありて亦長崎に赴き種痘の法を傳習し遍く近國に施し以て大に利を收めんと欲するや、春圃の先きに已に着鞭するを見て之を嘲み、百方構陷を計り、遂に其嘗て天草に航するに郵券を用ひて長崎に赴きし事を知得し、之を本藩に告發せり、藩因て春圃を譴責しと屏居を命する五十日、春圃慨然として曰く、吾が志や横天を救ふに急なる而已、今則ち既に少遂を得、此を以て罪を獲る吾れ復た何ぞ憾かん、乃ち門を杜ち客を謝絶して靜然讀書せり、時に詩を賦して志を述ぶ、後ち屢々長崎及び江都に往復し遍く大家豪傑を訪ひ益々見聞に長ず、人と爲り

質素にして制行方正、人に教ゆる則ち嚴、物に接するに誠を以てす、又慈惠ありて施を好み、毎年兩期に村中の貧民を聚め米數石を給す、嘗て連歲稔らず民或は饑を告ぐ、春圃之を聞き、私粟數十苞を出して之を恤み、又常に典舖を招き故衣類を購ひ以て乞丐に恵む、是を以て德を慕ひ恩を懷ふ者甚だ夥し、明治庚辰四月病歿す、識る者、識らざる者、一齊に歎惜痛悼せざるなし、春圃既に篤く西洋醫法を信じ、常に其道を擴張するを以て志こ爲す、嘗て其妻に語て曰く、他日男を生まば必らず洋方を以て家を興さしむ可しと、後果して二子を得る、曰く正純、曰く正直、何れも克く父の志を繼ぎて當時の大醫と爲る、蓋し春圃の志此に至て始めて達せりと云ふ。

廣瀬元恭

名は龔、字は禮卿、藤圃又は天目山人と號す、甲斐藤田邑の人かり、家世醫を業とす、元恭少にして句讀を松井某に受く、年十五に及び江都に遊學

し坪井誠軒の門に入りて蘭書を學ぶ、是より才思日に長じ、學業月に進む、誠軒命じて其塾を幹せしむ、居る事十餘年、去て京師に遊ぶ、遂に留り帷を下して専ら蘭學を講ず、元恭人と爲り奇偉卓犖、酒を嗜み客を愛し、一飲數升を盡す、其交はる所、岩垣月洲、頼三樹、森田節齋、吉田松陰等の如し、皆當世の名士たり、其他劍客、力士諸技の徒常に其家に寓す、諸生と雜處し議論喧然たり、或は其不律を諷す、元恭曰く方今天下多事なり、廣く此輩に接せざれば則ち世務を知るを得ずと、其平生の志此の如し、嘉安間開港説を首唱して往々時流の怪罵する所と爲る、元恭以て意と爲さず、治療の暇に又喜で兵制砲術を講ず、紀伊侯其名を聞いて之を聘するも辭して應せず、後ち津侯聘して醫員と爲し祿百石を給す、時に特に京居を許す、元恭京に在つて毎に兵書を譯して遙かに侯に獻す、慶應初年侯幕命を奉じて京師を護り、砲壘を八幡山崎に築くや、元恭勝安房と築事を幹營して尤も力あり、幕府金及び時服を賜ふて之を賞せり、維新後官軍病院を京師に

設け元恭を之が長と爲す、未だ幾ばくならずして病を得て職を辭す、明治三年終に歿す、享年五十、譯述する所（理學提要）（人身窮理）（西醫脈鑑）（知生論）（築城新法）等有り、皆世に行はる、子無くして門人の三枝元周を養ふて嗣と爲す、元周嘗て三重縣立病院長たり。

石川良信

初めは玄貞と稱す、陸奥櫻場の人なり、因て櫻所と號す、慧敏にして學を好む、年十五、江都に遊學するや、父之に謂て曰く汝名を天下に揚げざれば則ち再び郷に歸るを容さずと、良信既に都下に来り加藤隆道に従ふ、隆道勤めて伊東玄樸に學ばしむ、既にして其塾監と爲る、後ち北海諸國を歴遊して加賀に之き、藩醫黒川良菴の家に寓するや、偶々藩侯の囑を受けて洋書を翻譯す、居る事三年候之に祿せんと欲したるも良信乃ち辭して去る、尋で南海に遊び伊豫に寓す、業を受くる者蟬集せり、宇和島侯亦祿仕を勸

むるも應せず、候因て宗家仙臺藩に稟け強て之を祿せんと請ふ、良信之を聞き去て長崎に寓す、業を其地に開く、時に蘭人多く新刊醫書を船載せり、良信之を購ふて日夕講究す、安政四年六月江都に歸り、居を駿河臺に卜す、時に米國の領事巴兒里私江都に在り熱病に罹る、衆醫手を束ぬ、巴氏乃ち下田に歸る、幕府良信を召して往て之を治せしむ、良信一匙病立るに癒ゆ巴氏感喜して物を幕府に獻じて之を謝し、且つ大に良信を嗟賞せり、是に由て名聲漸く著はる、既にして虎疫大に都下に流行するや、良信獨り新治法を施す、全治する者極めて衆し、此時に當り伊東玄樸、戸塚靜海、竹内玄同、大槻俊齋等各々名を一時に擅ぐ、良信其間に崛起して鬱然として一家を樹立せり、名聲亦藉甚たり、文久二年仙臺侯召して侍醫と爲す、尋で幕命を蒙り出で、官醫と爲り、法眼に叙せらる、慶應三年侍醫長と爲り法印に進み香雲院の號を賜はる、時に幕政委靡振はず天下多故たり、良信身は散員に在ると雖も時に或は國事に參與し、其學士を選舉し軍須を儲蓄し

洋學を張り公武を協する等凡そ當時の急務は心を悉して冥贊せざるなし、戊辰伏水の役、幕兵大に敗る、其信徳川慶喜に随ひ東歸し、又隨て水府に屏居す、既にして仕を致して其郷松島に歸る、從遊する者甚だ多し、時に徳川氏の脱兵方に函館に據りて官軍に抗す、官軍其信の之と交通するを疑ふて乃ち捕へて仙臺の獄に下す、明年事解けるや放免となりて歸る、明治四年官召して軍醫寮七等出仕と爲し、尋で軍醫助に任じて從六位に叙す、會々官の軍律を釐革するや、其信洋書を譯述して以て參考に供す、七年に陸軍々醫監に累遷し從五位に叙せらる、後ち疾に罹り職を辭す、官之を聞て仍て非職班に次ぐ、後ち家に卒す、其信人と爲り雄偉慷慨にして議論毎に人の意表に出づ、平生屢々逆境に遭遇せしも少しも志氣屈せず、其松島に在り流離顛顛の間に尙ほも且つ力を譯述に用ひ、(内科簡明)若干卷を著はす、初め其信の交はる所皆當世の英豪越前春嶽、土佐容堂最も斷金と稱す、官を辭するに及び一切舊交を謝絶し、専ら思を吟咏に寄せ、日々風流文墨の

間を微逐す、人或は之に謂て曰く、先生の壯論久しく拜聴せず、豈に秘する所あるやと、其信微笑して曰く、今日天下に復た論ず可きもの無し、吾唯獨り太平を頌歌するを知る而已、其信の歿するや慶喜之を聞き愀然として曰く、惜む可し好男子を亡ふ。

司馬 凌海

名は盈之、字は子虧、損軒と號す、本姓を烏倉と云ひ佐渡の人なり、世々農を以て業と爲す、凌海に至て始めて醫を學ぶ、乃ち家を弟某に譲り姓を司馬と改む、蓋し島は司馬と邦讀相近きを以てなり、凌海天資聰敏、博聞強記、其書を讀むや、眼を過ぎて誦を成す、年を経るも一字を誤らず、甫めて九歳、能く詩を賦す、十二歳の時父某に従ひ江都に來り、唐津藩儒山田寛に就き漢籍を學ぶ、學日に進み人皆神童と稱せり、而して幕府の侍醫松本其順の門に入り、始めて蘭學を攻む、又佐倉藩佐藤泰然に従ひ醫術を

究む、居る事六年乃ち郷に歸る、後ち再び江都に遊び其順に随ひ長崎に到り蘭人明百を師として益々醫術を研く、既にして業大に進み漫遊して平戸に到る、遂に留りて業を開く、時に七新藥三卷を著はして名聲始めて世間に傳はる、既に郷に歸るや、佐渡奉行拔擢して醫官と爲し、洋學師範を兼ねしむ、幾くもなくして之を辭して又江都に往く、更に英學を攻む、時に朝廷新政を布きて四方の才俊を拔擢するや、凌海微士と爲る、明治元年三月醫學教授と爲り、明年大學大助教に任じ從七位に叙せられ、後ち少博士及び文部大教授に累遷して正六位に叙せらる、而して文部宮内兩省の出仕に任ず、幾くもなくして罷む、又元老院少書記官に任じ既にして之を辭す、後ち愛知縣病院醫學學校教師と爲り居る事一年、期滿職を解く、因て業を名古屋に開く、遠近治を乞ふ者履た垣に戸外に盈つ、嘗て病院醫學學校を私設するの志あり、偶々肺疾に罹り之を久ふして癒へず、因て豆州熱海に轉地せり、疾益々篤し、將に東京に歸らんとして、途次相州戸塚に到りて終に歿

せり、凌海才力英邁、六外國語を學ぶ、最も獨、英、蘭、に精し、往年獨逸醫繆兒列爾の聘に應じて來朝するや、未だ能く彼の國語を以て應接する者有らざるより、凌海其語を學ぶ、是に至て僅かに五箇月、乃ち出て之に接す、言辭爽快、毫も滯滞する所なし、繆兒列爾嘗て問て曰く、君我國に留學せし幾年、其銳敏や此類なり、其東京に在て私塾春風社なるものを創立して専ら獨逸學を教授し又（獨和對譯辭書）を著はし世に刊行す、一時に從遊する者千餘人の衆きに至る、盛なりと謂ふ可し。

島村鼎甫

字は鉉仲、柴軒と號す、備前の人なり、少にして才思敏贍、出で、姫路仁壽山校に遊學す、又大阪に抵り後藤松陰に師事し、而して諸方洪菴の門に入り始めて蘭學を攻む、鼎甫志を勵し精を専らにし、夙夜研究、學級毎に次を超ゆ、居る事一年にして全科を卒業す、同學諸生皆舌を捲いて畏服せ

り、鼎甫の名漸く四方に馳せ、京師の赤澤寛輔その名を聞き洪菴に乞ふて延て己の塾頭と爲す、嘉永四年鼎甫更に江都に遊び益々其術を研磨せんとして嘗て譯述する所の診則稿本を賣て金若干を得て遂に東行し、伊藤玄模に就く、學幾くならずして阿波侯に聘せられて侍醫と爲る、鼎甫亦幕府に召され醫學所の教授と爲り、朝政維新後に及で大學少博士、文部中教授等に累遷し、東京大阪間に奉職して聲名隆然として下らず、晩年多病を以て官を罷め風流文墨を以て自ら娛む、明治十四年二月遂に歿す、享年五十二、鼎甫素より漢文に熟す、其譯する所の文辭や條達明暢、世争つて傳誦す、當時譯書の醫學校及び諸家に出づるもの多くは鼎甫の檢閲を経て之を行ふ、時人因て以て鼎甫の能文を稱せり、譯する所（生理發蒙）（瘡痍新説）等有りて世に行はる。

石井信義

〔229〕
宇は壽郷、石腸と號す、美作の人なり、幼にして穎悟人に絶也、神彩秀徹郷里の人目して神童と曰ふ、安政初年、父に従ひ江都に移り、箕作阮甫、松本弘菴等に就て蘭書を講ず、後ち長崎に往て蘭人明百氏に従ひ醫術を攻む、去て大阪に遊び業を洪菴に受く、鼎甫と同學たり、時に洪菴業最も盛にして門下素より俊才多し、其教ゆる所の學科を入級に別ち、半年毎に業を試み、試に中る者は一級を進め、其拔萃なる者は特に超進を得せしむ、信義亦讀書精密にして其蘊奥を究めざれば則ち已まず、故に常に衆と會講するや、會講の則白點を以て勝と爲し、黒點を以て敗と爲す、信義居る事四年、その間に未だ嘗て敗を取らず、其黒點を得ること唯だ一のみ、是に於て石井黒點の名衆中に喧傳せり、信義則ち文久元年を以て再び江都に歸り仕を勝山藩に筮す、既にして幕府の召を蒙り出で、醫學所の教授と爲る、

後ち鼎市と共に大學少博士、文部中教授等に累遷し、名聲隆然たり、信義も亦明治十五年一月歿す、人ご爲り清畑にして温和、而して口辯有り、其書を講ずるや雄辯流るゝが如し、理義精微、聞く者歎服せり、亦著述する所有るも皆家に藏せりといふ。

黒川 良安

名は弼、靜海と號す、文政十一年、年甫めて十三、父に隨ひ、長崎に赴き、譯官吉雄權之助に就て蘭語を脩め、また蘭人シーボルトに親炙して醫術を學ぶ、高島秋帆等と莫逆の友たり、業成るの後ち諸國を周遊して江戸に來り坪井信道(誠軒)の門に入る、已にして去りて松代藩士佐久間象山の家に寓す、象山授くるに蘭書を以てし、又漢學を象山に受く、天保十一年加州藩に仕ふ、弘化三年七月侍醫に擢でられ、次で壯猶館創立の擧あり、藩士蘭學に洋式兵法を授くるの所たり、良安與りて力を盡し已にして成立す、

安政元年擧げられて壯猶館譯方兼務となる、四年中納言に扈從して江戸藩邸に在勤す、會々蘭書調所教授手傳の命を拜し、杉田成郷、箕作阮甫、川本幸民等と同僚たり、幾もなくして其職を辭す、明治三年藩の醫學館を創設するに方りて計畫主任を命せられ、且つ其教授に擧げらる廢藩置縣の際(庚午十一月)文學教授の命を拜し、職俸五十石を受く、翌年八月願に依りて辭職す、爾來世塵を絶し風月を友とせること約半年、明治二十三年九月中風を病みて歿す、其生文化十四年二月を距る、享年七十又四。

淺田 宗伯

信州筑摩郡栗村の人、因て栗園と號す、初名は直民、後惟常と改む、其先は源頼光朝臣に出づ、筑摩郡淺田の莊に住するを以て淺田と名乘れり、祖父、父共に醫術に通じ、文筆亦妙なり、宗伯幼時は到て壯健なりしも極めて魯鈍なり、四書孝經左傳文選を習ふに一向に通曉する所なく、師は大に

之を卑みたり、年十五にして徂徠集を讀みて大に困苦す、戰國策を讀むに至りても、史記列傳を參照し、評註を見てやうく會得せり、而も志氣凡童に異なる所あり、暇には稗官野乘を讀んで、古の豪傑を希へり、而して祖母は常に傍に在つて其立志を責めたりといふ、後ち高遠藩に遊び醫術を脩め、亦京都に入り師に就て専ら傷寒論を研究し、刻苦研磨の末、江戸に出で、茲に初めて開業せり、然れども三年にして宗伯の名を知る者一人だに無し、時に宗伯某人の紹介に仍て、幕府の醫官本康宗圓に謁見し、是より其紹介によつて他の諸名家に附し、漸く業行はるゝに至れり、斯りし間に在郷の父危篤の報あり、到れば已に後るゝ一日、宗伯の痛悼已む能はざりし、宗伯是に於て、大に名を立て家風を興して之に酬ひんと、親戚を人に托し、單身江戸に還り、晝夜勉勵せり、當時宗伯惟へらく、今や學と術とは二途に分れ、何れも他に疎にして以て病を托するに足らず、と、即ち(脈法私言)(傷寒辨要)(雜病辨要)等を著はし、病理治法合一の論をなし、門人大に増加

せり、亦惟へらく、醫道を壞る者は洋醫に若くはなし、と(原醫警醫記事等)を著はして西洋説を辯駁す、是より十餘年、姓名次第に盛んとなる、諸侯より招聘屢々なるも、辭して就かず、安政五年、將軍照徳公に謁して徵士となり、偶々佛國公使の病を治して幕府より白銀を賜はり、亦佛帝より時計、羶羯等を賜はる、慶應二年照徳公の病を診して脚氣衝心とし、江戸に還つて天障院初め大奥の侍醫となり、三十人俸米二百俵を受け法眼に叙せられたり、幕府傾頽に方り、和官及天璋院の命に依り、熾仁親王に謁し、江戸鎮撫を請ひ、周旋甚だ務めたり、宗伯身醫を業とするも有爲の氣多く、幕府の末路には川路左衛門、水野筑後、小栗上野介、黒川近江、井上信濃等と交を結び、執政と時事を談じて口角沫を飛ばす事屢々なりし、その他藤森天山、林鶴梁、佐田介石、羽倉外記等と交はり篤く、明治四年執政の職を辭し、牛込に隱居せしに、來つて治を乞ふ者多く、清國公使、朝鮮公使等常に診を求む、明治十二年、皇太子誕生の節、宗伯は尙藥として常に

(244)

宮中に伺候し、年俸千圓絹四匹を賜ひ、從六位に叙せられ、是より常に宮中に伺候せり、十六年滋宮、増宮兩親王醫藥の効なく薨去す、宗伯自ら責めて骸骨を乞ひしに許されず、即ち其職に在る十年、明治二十一年五月、東宮侍醫の職を辭し終身金千圓を賜ひ且つ從五位に昇叙さる、宗伯老て愈々健、爾來ますます漢醫家の泰斗として老後の勉強怠りなし、明治二十七年四月十六日、終に逝けり、享年八十一、宗伯常に論語を以て道徳標準とし傷寒論を以て醫術の玉科金條とし、常に同人に此兩者を讀ましめたり、又詩文を能くし、漢文殊に勁健なり、著はす所、上に擧げたる外我國の醫傳缺けたるを補はんが爲めに、(名醫傳)(先哲醫話)(杏林風月)等を著せり、平生髮を結び駕籠に乗て往來すといふ。

本朝醫人傳 大尾

明治四十三年三月廿五日印刷
 明治四十三年四月六日發行

本朝醫人傳

著作
 所權有

正價壹圓五拾錢

著者

紫竹屏山

發行兼
 印刷者

青木恒三郎

印刷所

大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷
 嵩山堂印刷部
 電話西七八二番

發行所

大阪市東區心齋橋博勞町角
 東京市日本橋區通一丁目角
 青木嵩山堂
 (大阪) 電話南千五百番
 (東京) 電話本局七八九番
 大阪 貳貳〇番
 東京 貳貳八九番

과 9K 74





